レッシング
アンチ・ゲッツェ (三)

井汲越次訳

アンチ・ゲッツェ

その五

Cognitio veritatis omnia falsa, si modo preferantur etiam quae prius inaudita erant, et dijudicare et subertere idonea est.

Augustinus ad Dioscorum.

〔本当のことをよく知ということはどんな嘘でも、それこそ前代未聞の嘘でも、すべて一度公然となったからには、検討し反駁するにもっ来のことです。

デォオスコルス宛　アウグスチヌス書翰〕

――七

当時はまだ聖職者が一切であって――われわれのために考え、われわれのために食べていたとは、おお、何と幸福な時代だったことか！その時代を主任牧師さんは天晴れ美事に取返してくれようというんです。この聖なる目的のためにドイツの諸侯も自分と一致協力してくれないかっ

て！　何やかやと言葉巧みにかれらに説いて、天国や地獄の話をしてきかせておいでなのです。さぁさ、耳をかさぬ者はものは目にみるがよい。生意気な知恵にお国言葉は、謀叛の起きる温床たる糞土だぞよ。今日は詩人、明日は国王弑虐の強か者じゃ。クレマンラヴァイヤック、ダミアン[二]の徒の生れるのは、聴罪席の室内にはあらず、パルナスの山上なのだじゃて。

主任牧師さんのこの紋切型にはまたいずれお目にかかるとして。今日のところ、誰を相手のお話か、まだ十分はっきりしないが、さし当りはっきりさせておきたいことは、ゲッツェは許してるみたいだが、どうしてなかなか絶対に許しっこないということです。それから、虎は木の檻を破ってくれとは迷惑だと怒っておいでだが、迷惑なのは爪の方だということなのです。

私の云うのは、つまりこうなのです。――宗教と聖書に対して、氏が宗教と呼び、聖書と呼んでいるところのものに対して抗論してもかまわないとの氏のお許しが全くちゃらんぽらんにすぎない。許していながら、許してはおられないのです。というのは、折角のお許しも三百代言宜しくの但し書でがんじがらめになっていて、よっぽど用心してかからないと、空念仏だからです。

この但し書についても、言葉の点ではすでに十分説明ずみだし、当人の意図の点についてもすでに触れておいたところです。のこっているのは、痛いところをつかれたこの但し書の核心に当る箇所です。これがまたなかなか不得要領で、一見嘴をさしはさむ余地もなさそうなだけに、われわれとしても一層念を入れてかからなければなりますまい。

「ただ」、主任牧師さんのお言葉だと、「攻撃する側とて、全キリスト教界の信を集めている聖者たちが、聖霊に感じて[三]語り記されていることを、馬鹿の、悪党の、墓発きなんぞと冒瀆する自由はあるまいて。」

前述のように、いかにもごもっともな話で、いまさら何のかんのと駄目をおすのもおこがましい位です。またそんなことをしたところで、所詮悪口雑言の類を出やしません。だがそうやってこそ始めてお互に諒解のつくものではないでしょうか！

主任牧師さんのおっしゃるのは、攻撃する側とて、わけもなく、口から出まかせにこうした悪口を云う自由なんてないというだけのことなのでしょうか？それとも同時にこうおっしゃろうとしているのではないでしょうか？　攻撃する側とて、そうした事柄に嘴をさしはさむ自由はないに違いないし、そういった証拠があがってこそ始めて使徒たちのことを或る程度あれこれ云えるようになるのではないかと。これは、氏としてもきっと思いも設けなかった問題なのです。

これが前の場合のことのみ云ってる分には、氏の言い分も至極ごもっともです。そんな下らぬことにはキリスト教徒とていまさら見向きもしません。空虚な悪口なら、そう向きになって怒るものではありません。或はキリスト教徒自身なり、乃至はその信仰に対して向けられたもかも知れません。それなら、キリスト教徒は之に対するに、冷静な軽蔑あるのみです。キリスト教徒に対して他に何ら争ふべき手だてもないのに、これと争う相手こそ禍なるかなです！――

だが主任牧師さんが同時に後の場合をも含めて云ってられるのなら、やかましい神学屋のお上さんが持前の啖呵を切ってるまでです。それならおよそキリスト教の真理を本願とするところのものは挙って反対せざるを得ません。――どうしてって？　だって、そうなれば、キリスト教とて絶対触るるべからざる患部があり、空気にあててもいけない患部があるっていうことなのですか、それともそんな患部なんてありぁしないってことなのですか？　キリスト教の味方にだって、「云っていいことと、云ってわるいことがあるじゃないか！」と、こんなお叱言を年がら年中きかされなければならないものでしょうか？このお叱言のあさましい、あさはかなことといったら！　繰返して申上げますが、そんなお叱言なんかいい加減やめだと云わないのは、神学屋のお上さん一人きり位のもので、まったく生懲りもなく、いや、それ以上輪をかけて行動によって正当化しようっていうんです。だからといって、家々に忍び寄って来る世を憚る自由思想家に向って、「さぁさ、洗いざらい吐き出せ」と、真向から喰ってかかる神学屋の毒舌家の方がまだましだなんていうんじゃありません。双方ともわたしには我慢がならないんです。でも妙なことに、この場合でもかしまし屋のお上さんと毒舌家という奴とは、よくよく一心同体だってことです。思うに、本当のキリスト教徒はあんなお上さんや毒舌家の真似なんかできるものじゃありません。自己の理性に対しあまりに不信であり、自己の感情に対してもあまりに誇りが高くて――

全般的に云って、以上が主任牧師さんに対する反対論の骨子です。次に、問題とされてる個々の事例にうつることにしましょう。というのは、濫りに暴言を弄している当人とは外ならぬわが匿名氏のことだからです。

だが匿名氏が一体何処で濫りにそんな暴言を吐いたのです？　一体何処で、使徒たちのことを馬鹿の、悪党の、墓発きなどと冒瀆したのです？　断片の中で、一箇所でもそのような不逞の暴言を吐いてる箇所があったら示していただきたく、憚りながら主任牧師さんに篤とお願いする次第です。主任牧師さんこそこうした暴言を最初に口外し、筆にされた――最初に考えつかれた唯一人の御仁なのです。氏は、氏こそ、匿名氏

を冒瀆してくれんと、匿名氏の名において、使徒たちのことを冒瀆せざるを得なかった御当人なのです。

だがこう云ったからとて、有難くもないあの汚名を文字通り着せまいと、その一点のみから匿名氏のために弁護しているように思われてはかないません。いや、それどころか、わが匿名氏は使徒たちについてそんな汚名を肯定するようなことは、積極的には一言も云ってはいません。そうした内容を頭から肯定するようなことは、何処にも一言も云ってはいないのです。

わが匿名氏が「キリストは蘇られたのではない、御弟子たちが御遺体を盗んで行ったのだ」と云って有無を云わせないのだというのは、事実無根です。何も使徒たちに遺体搬出の犯行の事実ありと証言したのでもなければ、また証言しようとしたのでもないのです。こうした犯行の証言し得るものでないことは、かれとてもよくよく承知の上のことです。大体嫌疑というものは、極めて確実な嫌疑だとて、なかなかそう証拠があってのことではないからです。

わが匿名氏はただこう云っているだけなのです。――もともとこの嫌疑たるや、何もかれの脳髄の産物ではなく、新約聖書そのものに由来することなのでして、この嫌疑なるものが墓固めについてのマタイ伝の説話によってすっかり反駁されたとはなっていず、未だに信憑するに足る確証があがっているということにはなっていないのです。それに前述の説話にしてからがその精神的性質上極めて疑義あるのみならず、何としても *ἅπαξ λεγόμενον* 四〔一度かぎりの発言〕でもあり、この種のことは歴史上一般にあまり信のおけるものではないのです。況んやこの場合、この説話の事実に一番関係ある人々ですら敢えてこのことを引合に出そうとしないにおいておやということなのです。

さてこうなると、この事件の真相よりもこの説話の信憑性ということの方が問題だということのわからないものはないでしょう。それに実際にあった事件の伝記でも信じられないこともあり得るのだから、さきの事件の真相をこの説話一つに依ろうとするかぎり、事件の真相に対する不信の度も一層甚しくなることのわからないものはないでしょう。

ところが、わが匿名氏はなかなかどうしてそれ位の程度ではおさまらなかったのでして、かれの示そうとしたことは、カトリック信者なら一も二もなく信じて疑わないところなのですが、福音書家の著に成る説話のうちただひとつ或る種の出来事にかぎり、旁証があがらないからには、疑問の余地なき確実性あるものとはどうしても考えられないものがあるというのです。また確率性があれば事実とし、信憑性があれば否定できないこととしていたとしても、また使徒たちがキリストの遺体を搬出したことも絶対に歴然たる事実だと考えていたとしても、これらの方

々のお蔭で数えきれない位多数の善がこの世に生れたということは、匿名氏とて否定されてはいないので、それを何事にまれ万事お蔭を蒙らざるはないこれらの方々のことを――日頃こうした言葉が口癖になっておられる主任牧師さんならともかく――まさかあの匿名氏が「詐欺の、悪党の、墓発き」などと悪態をつかれるものではないと、わたしも信じて疑わないのであります。

もっとも単に礼儀上から、云わずもがなのことは云われなかったのではあるまいか。またよく云われるように、下手に無礼なことを云って他人を怒らせまいとの念慮からばかりでもありますまい。いくらなんでも、こいつはちとややこしいことになるぞと思い込まれていたればこそ、云われなかったのではないでしょうか。

というのは、道徳的行為行動というものは、いかに時代が違い、民族が違っていても、それ自体として見れば同じ事実なのですが、だからと云って同じ行為行動が必ずしも同じ名で呼ばれるとはかぎらず、また同じような行為行動に対し、その当時当該民族の間で慣行の名とは違った何か別の名で呼ぶのも当を得てないからあります。

さてそうなると最古の最も権威ある教父たちでも、目的さえよければ、嘘も嘘とはみなされなかったので、そうした考えは使徒たちでさえもっておられたとて別に怪まなかったというのも、これまた歴然たる既成事実なのです。この点について歴とした神学者自身の口からちゃんと説明をしてもらいたいというのなら、リボウの『嘘も方便』[五]《de Oeconomia patrum》という論文を読まれるがよい。リボウは同書の中で、教父たちが殆ど例外なく《integrum omino Doctoribus et coetus Christiani Antistitibus esse, ut doles versent, falsa veris intermisceant et imprinis religionis hostes fallant, dummodo veritatis commodis et utilitati inserviant》〔キリスト教会の師たり長たるものが権謀術策を弄し、嘘偽と真実とを混同し、また殊に信仰の敵を欺こうとも、之によって真理にいくらかでも資するところがあるなら、ちっともかまわないことだ〕と、確く信じて疑わなかったと、躍気になって説明している箇所に至ってはまったく有無を云わさないといった有様です。教父たちがこの種の《οἰκονομίαν》〔術策〕やこの種の《falsitalem dispensativam》〔詐欺瞞着〕は使徒たち自身用いられたことだと云っている別の箇所も、これまた否定すべからざるところです。就中、聖パウロについてヒエロニムスの云っている*素朴さ加減には、さすがにあの素朴なリボフ自身目を瞠っている位だが、さればとてヒエロニムスの真意はいささかも変ってはいないのであります。

*《Paulus in testimonis, quae sumit de veteri testamento, quam artifex, quam prudens, quam dissimulator est ejus quod agit!》

〔パウロは旧約からとった証拠をいかにも巧妙に、いかにも利口に取扱っておられるが、その際御自身の真意をかくすこともよく心得ておられたのだった！〕[六]

初期教父たちや使徒たちの卒直さについてのこうした見方は今日われわれにはいかにも奇異な感がするが、之をただ単なる解釈上の便法とか単なる美辞麗句のためにすぎないなどと云うのではないのです。言と行とは一般に考えられてるほど、そうかけ離れたものではないのです。聖書の章句を、善意良心に反せず勝手に歪めるようなら、外にどんなことでもやりかねません。偽証だってやりかねないし、聖書の偽作だってやりかねません。諸々の事実をでっちあげ、更にこれを裏付るがためにはいかなる手段も選びかねないのです。

いやはやとんでもない、使徒たちがどんなことでもやれたのは、教父たちにその中の何かひとつやってのける力があると見たからであって、そのことをいまわたしに説明しろと云われちゃかないません！　わたしはただ次の疑問を喚起すれば足りるのです。――それは、今日(こんにち)われわれはこのことに関して教父たちの功罪を云々しているのですが、その精神で使徒たちのせいにしているものの、何のかのと他のことまで一々心の正しき男が云々することのではないのです。

ところでわが匿名氏は正にこの心の正しい男だったのであります。氏は金目の少い硬貨で借りた借金をば、何も金目の多い硬貨で以て返せと云ったのではありません。法のゆるい時に犯した犯罪を、後日厳しくなった法で判決したのでありません。犯行当時にはなかった罪名を今日の犯人に着せたのではありません。心中では常々、かまされたのだと思ってたでしょう。だが、ぺてん師どもにかまされたとは、きっと用心して云わなかったまでです。

それを自分は初めの方のことを信じてたのだと云い含めることができるので、みんなてんでにいい加減な誤魔化しをやるものだから、海のものとも山のものとも区別のつかない民衆の憤りを買ってしまうことになるのです。だがこうした目的もやはり詐欺罪を弁護しようとする目的の中に入るかどうかは暫く措くとして、少くともそこから生れる利益なるものはどうもわたしにはまだよくわかりません。だが今日の民衆とても、かれらを煽動したがってる説教家なんぞよりはずっと頭もよく分別もあるのじゃないかということが、いまようやくわかったような次第です。

ゲッツェ氏もよく御存知の通り、抑ゝわが匿名氏の主張していることは、使徒たちは当時の新興宗教、新興国家の立法者、建設者たちがこぞってよしとしたことをそれなりにやってのけたというまでのことなのです。だが氏の書いたり説いてる相手側の民衆の耳には、それが一向にぴ

んと来ないのです。そこで氏は民衆の言葉をつかって民衆と語り、わが匿名氏こそ使徒のことを詐欺の、悪党のと冒瀆していると喚いているのです。――よかよか！効果はてき面だ！――ところが、前述のように、どうやらそうはうまくは問屋はおろしません。というのは、いかにつまらぬ民衆だとて、お上の指導宜しきを得ば、時につれ時代につれ次第に啓蒙開化され、向上して行くものだからです。すなわち某々説教御諸君の場合のように、宗教も道徳も未来永劫御先祖たちと変らないのが原則だなんてことはありません。かれらとて民衆をふり切って行けるものではないが――民衆はどんどんかれらをふり切って行きます。

アンチ・ゲッツェ

その六

Non leve est, quat mihi impingit tantae urbis pontifex.

Hieron. adv. Riffium

〔このような大都市の司祭長からお叱りを蒙るとは、ただごとではございません。

ヒエロニムスのルフィヌス駁論〕[1]

――八

わたしの論証したのは（アンチ・ゲッツェその三）、抱束されざる理性の宗教に対する懐疑反対論から客観的に宗教がひき出す利益はとても本質的な大きなもので、現実にそこから生れる不利益以上におそれられてる不利益の如きはすべて一顧だに値いせず、従ってこの主観的不利益の続くのも客観的利益が出はじめるまでの間にすぎず、それが出た途端に客観的利益も主観的利益と化しはじめるということからしても、このことは明かです。わたしの論証したのは、いやしくも本当の最善の教会というものをよく理解した教会なら、宗教論争の自由を何らかの方法で

抱束するが如きは思いもよらぬことであり、論争が何人(なんびと)により、また何語(なにご)で行なわれようと、言葉の点から云っても人格の点から云っても抱束すべからざるものだということです(アンチ・ゲッツェその四)。――わたしの論証したのは、論点がはずれていると云って、問題点を除外するが如きは最も許すべからざることで(アンチ・ゲッツェその五)、そんなことをすればかえってそのために疑惑を生むことになる。というのは、こうした疑惑が宗教にもたらす弊害の方が、除外した問題点についての論争以上に益々甚しくなるは必至だからだということです。――

さてそうなると、教会反対論を書いた書物が、どんな性質なものであれ、生れぬ先から息の根をとめてしまったり、日の目を見せないようにしてしまう権利が教会にありとは、教会側とてとても云えた義理ではないことははっきりするでしょう。――もっともこれらの書物の生みの親の側でもっとはっきりとことわっていれば、話は別です。それにしても教会に誤りを追及されてばかりいるこれら張本人だとて、われわれを罪に堕そうとしかしていない教会の意志に反し、善根を施している御仁にはふんだん与えられているあの寛宏な取扱いを悉く教会から受けてるのに、教会から追及されるような誤りもせず、ただ他人の誤りを指摘し、それによって当然期待さるべき利益を一日でも早く教会にもたらそうとした御仁を、どうしてまた教会がおのが仇敵と認めることができよう? この書物の著者にしても一向教会に敵視されてもいないのに、一介の無神論者の書物の編者がどうして教会の処罰をおそれなければならないのでしょう?

ヒエロニムスがかれ自身の判断で――真のキリスト教にとっては甚だ以て有害極る書物をギリシャ語から翻訳するや――それはオリゲネスの著『神学原義』(περὶ ἀρχῶν)でした。いいですか、翻訳したのですよ! だが翻訳とは何と云っても単に編輯という以上のことです――この危険な書物を翻訳するや、かれの意図したところは、ルフィヌスのような他の翻訳家の糊と鋏のやっつけ仕事から救い出すことだったのです。同書の力を精いっぱい、その魅力を悉くラテンの世界に提供することにあったのです。これについてチランヌス派[三](schola tyrannica)某がかれのことを胸中甚だ罪当りな悪事を蔵していたかのように難ずるや、かれは何と云って答えたか? 《O impudentiam singularem! Accusant medicum, quod venea prodiderit!》〔おお、途方もない恥知らずめ! 毒を毒だと教えたと云って医者を告訴するとは〕――抑々ヒエロニムスがどんな心算であのチランヌス派と呼んでいるのか、わたしには勿論わかりません。だが当時すでにキリスト教の教師先生方の間にもゲッツェの如き徒輩のいたには、驚き入ったじゃありませんか! だがわたしもすでにひそかに同じような答を用意しているのです。「暗やみに歩きまわる疫病を衛生局に通告したからといって、わたしのことをペスト菌を国内に持って来た保菌者だというのですか?」*

*アンチ・ゲッツェ　その一、四頁〔この頁数はレッシングの原注。本訳文では本論集第四号三八頁〕

断片の編輯をはじめた当時は、承知の上のような口をきいてていたものの、勿論事情はまたよく承知してはいなかったのでした。いまここで使わせてもらっているみたいだが、これを刊行者の弁解に利用しょうなんてことは当時は一向考えてもおらず、また考えようともしていなかったことでした。旧書が現在完本として存し、しかも数ケ所にあることだし、見た眼にはっきり来ないからと云って、原稿本で印象のうすれるものではないことは、承知はしていても、知ったような口はきかなかったのでした。だが自分ながらこうした事情を自分の自己弁護に利用しようとした感なきにしもあらずのようです。

いつか何かの序でにわが匿名氏の著書の中から極く罪のない箇所を一箇所披露したところ、その中からもっと抜萃してくれとの要望があったですが、こうした事情がなくともわたしとしては十分云い訳がついたのでした。いや、もっとぶちまけて云ってしまうとしましょう。

実はみんなからああやいやい云われなくとも、わたしはあの通りやっただろうと、はっきり申上げたいところです。もっとも少々はおくれたかも知れませんが。

というのは、一つには著者が世を教え喜ばせようとして書いたものとわたしが見た書物で、原稿のまま出版されてないものには、すべてわたしはまったく迷信的な尊敬を払っているものなのであります。死とか、その他とかく世の活動家にとって御同様面白らぬ原因のために折角の高見が次々に水泡に帰するのを見ると、御同情に堪えません。だが、人間と呼ばれるに適わしい者なら、棄子を見て惻隠の心を起さないものはありますまい。どうしてなかなか息の根を止め切れるどころじゃない。見つけた場合にそのまま平気でうっちゃり放しにしていられるものじゃない。孤児院に入るなり、連れて行くなり、少くとも洗礼と名前ぐらいはつけてもらってやるものです。いずれにせよ勿論好き不好きはあるでしょう。この子の方があの子よりにっこり微笑ってくれたというなり、この子の方があの子より余計にぎゅっと指を握ってくれたというふうに。

だから、せめてわたしはわたしなりに何とかしてやりたかったのです。――そうなると、何枚襤褸っ切れがいろうと仕様がない、何とかして人間らしい精神のあとがのこるようにしようとしたまでのことではないでしょうか？――何とかして、こうした精神の棄子をみんなのこらず立派な孤児院に入れてやれないものか、指定の立派な印刷所という孤児院に収容してやれないものかというまでのことなのでした。ところが実際にはその中のうち極くわずかの者しか収容されられないとしても、何もわたし一人の責任ではありません。これでわたしとしてはできることは

しているのです。そして各自それぞれ同じようにやりさえすればいいのです。なぜこの子よりあの子の方を先きに孤児院に連れて行くのか、なぜもっと健康で可愛いい棄子に余計指をにぎろうとしなかったのか、その原因なぞわたしひとりじゃどうにもならないことが多いのです。この場合でも大概、小さな、ちょっと気がつかないような原因がたくさん相寄り相集って作用しているので、まったく≫habent sua fata libelli[五]≪〔書物には書物の運命がある〕という通りだからであります。

だがわたしは浅学菲才にして――それなればこそ、司書に生れついているのか、性来司書の任に堪えざるものか、どういったらいいか、われがらよくわかりませんが――この自分の浅学菲才なことを考えると、自分の個人的地位を有難く思っていないことはないのです。わたしは自分が他所ならぬ当地の図書館長であることは、わたしの幸甚とするところです。しかも余人ならぬ御主君の図書館長であることは、わたしの幸甚とするところです。――

最初の数世紀、キリスト教内反対論を書いた異教徒の哲学者のうち、ポルフュリウス[六]と云えば、勿論どう考えてみても、極めて明哲、極めて博学な学者だったと同時に、危険極る人物だったに違いありません。というのは、その著『キリスト教徒駁論』(κατὰ Χριστιανῶν)十五巻といえば、コンスタンチヌス及びテオドシウスの勅命によって厳重探索され、破棄の上、今日一片の断簡さえのこっていない位なのです。これにわたりあって堂々反対の論陣をしいた三十有余の著者までも――その中には著名な大家もいたのです――そのためそのまま生死不明になってしまっていたのです。思うに、いずれは世の中から抹殺さるべきこの論敵の書物の中から、あまりにもたくさん、あまりにも重大な箇所を引用してたからなのでしょう。――だがそれにもかかわらずポルフュリウスのこの怖るべき書物が一部何処かに蔵されている――すなわち、イーザク・フォッシウスがサルヴィウス[七]に説いているところによると、フィレンツェのメディチ家の図書館にあるが、同図書館ではこれを厳秘に付し、何人も読むべからず、寸分その内容を世間に知らしむべからずということになっているというこなのです。もしこれが事実だとしたら、同時に大侯爵にしてくれるとしたところで、フィレンツェの図書館長は御辞退申上げたい。但し、真理とキリスト教とにとって甚だ以て有難からぬ禁令は即刻撤廃し、即刻ポリフェオリウスも公爵邸内で印刷に附し、有難迷惑な公爵領なんぞも即刻当局に還附してもよいということならその限りではございませんが――

*リットマイヤ『コンリング書翰集[八]』

わたしの考えてたのは、アベラール[九]その人のことなのです。アベラールはあの野蕃時代に盛んに反宗教論をぶちまくっていたものだが、この反宗教論を公表しようものなら、短刀直入直ちに悪魔の許に追いやるぞとはさすがの坊主どもにも、答える気を起させなかったというのです。聖ベルナルトゥス[一〇]も種々様々なアベラールの著書の多くに対し、これまた少からぬ危険を冒して出した著作集があるにもかかわらず、マルテーヌ、デュラン、ベー・ペッツ[一一]もこの著作集の補遺をつくっているにもかかわらず、それにもかかわらず、アベラールの宗教観を特によくうかがうようなそういう全集が今日いまだに出ていないとは、どうして信じられよう？　ダシェリ[一三]は、何処の図書館だかわからないが、これを発見し、写しをとって印刷に附そうとしたのです。ところがダシェリは他の学者に――たしかやはりベネヂクト派の修道士でした――相談に行ったのでした。いや、予め前もって相談に行くことになっていたのでした。幸い発見されたアベラールの著書『霊感に従って、二つの立場からキリスト教のすべての秘義を論ず』（in quo, genio suo indulgens, omnia christianae religionis mysteria in utramque partem versat≫）は、地獄の劫罪に当ると断罪されてしまったのであります。** そしてダシェリの写本はマルテーヌとデューランの入手するところとなったのです。ところが、これだけ多数の史書、神学の古書を壊滅から救ったこの御両人は、がらくたをもう一冊保存する気になったのでした。たまたま哲学書だったばかりに。――あわれながらくた本を！　神よ、汝をわたしに得させたまえ、わたしがベネヂクト派の修道士でないことが確実なように、確実におん身を上梓いたします！――こうした身でなければ、これ以上とてもこの種の原稿は見せてもらえないのなら、わたしとてもなれるものならこうした修道士になりたい位です。一年とたたずに教団から叩き出されようとかまいません！

* アンチ・ゲッツェその四、一六頁（本訳では論文第五号四九頁）

** マルテーヌ・デュラン共編、『未刊本逸事』（Thes. Annecdot.）

そしてまたこれはきっと事実そうなるんではなかろうか。こちらがあまりたくさん印刷しようとしたら、教団の方でも援助はおことわりということになるでしょう。あのルッター派のおやじなら、一層邪けんにあたって来るでしょう。でも教皇位階制度のお役にたつような原理なからには真のキリスト教のためにも役にたつかも知れないと云われても、わたしなら決してまるめ込まれるようなことはないでしょう。

「だがそれはみんな悪事が働きたくして仕方なく、つい手が出てしまったまでだと、みんなそれぞれ悪事の弁解をしょうというのにすぎない。大体、棄てられた原稿を探し出すのが病気なら、その病気のために苦労するがいいのだ。もう結構、本稿は少くともあの『イエス伝物語』[一四]同

様、怪しからん書物だから夢々活字にさるまいぞ。」

御注意は有難い！だが、それでは『イエス物語』は活字によるまでもないものでしょうか？するとあれを活字にして発表した連中は、キリスト教徒ではなかったのでしょうか？　キリスト教徒に対して最初にああ手厳しくやっつけたのは、改宗ユダヤ人が一人いたきりでした。だけどポルケトゥス[一五]はどうしました。ルッターはどうです？　ところが、ワーゲンザイルときら、ヘブライ語の原典まで救出しなければならないと信じてたんです！おお、あの無分別な陰険なワーゲンザイルの奴め！むかしはユダヤ人のうち『イエス伝』が読めたのは千人に一人いたかいなかった位です。ところがそれが今じゃもうみんな読めるのです。さらでだにあの邪けんなワーゲンザイルが、もう一度神の前で弁明しにくくなろうなんてことが、何処にあるのでしょう！　あのいけ好ないヴォルテールのおッさんはワーゲンザイル版から途徹もない抜萃をこしらえておいでだったが、最初からレイモンドゥスとかポルケトゥスの古版本から探し出さねばならなかったとしたら、どうしてなかなかやれたものじゃなかったでしょう。――

ねえ、そうじゃありませんか、主任牧師さん？　申添えておきますが、ワーゲンザイルがこの冒瀆の書をヘブライ語とラテン語ではなく、ヘブライ語とドイツ語で活字にしたのなら、ヴォルテールだってあの抜萃をつくるのはきっとやめたに違いありません。このことはおよそ反宗論の著述がラテン語でしか聞かれないということがどんなに全般の利益だったかという一つの小さな見本ではありますまいか。そうじゃありませんか、主任牧師さん？

そうはいうものの、主任牧師さん、ワーゲンザイルはその著『サタンの火箭』(《Telis igneis Satanae》)の長文の序文の中で御自分の仕事をなかなか上手に弁護しておいでです。それをいま一箇所だけ引かせてもらうことにしますが、ひょっとするとわたしなんかまで一緒くたにしておられるのではないかと思われる位です。序文の全意をよく要約した箇所がそれなのです。《Neque vero, non legere tantum Haereticorum scripta, sed et opiniones illorum manifestare, librorumque ab iis compositorum, sive fragmenta aut compendia, sive integrum contextum, additits quidem plerumque confutationibus, aliquando tamen etiam sine iis, publice edere, imo et blasphemias impiorum hominum recitare, viri docti piique olim et nunc fas esse arbitare sunt》〔だが信心深く博学な人々は今も昔も異端の書を読まれたばかりでなく、かれらの教説を紹介し、断片であれ、抜萃であれ、かれらの著した書物を、間々附さないこともあるが、多くは反駁まで附けて原本通り出版する外、無神の

徒の冒瀆の書まで復刻する権利があると考えていたものである。〕

アンチ・ゲッツェ

その七

Ne hoc quidem nudum est intendum, qualem causam vir bonus, sed etiam quare, et qua mente defendat. *Quintilianus.*

〔君子が弁護するのはどういうことかというだけではなく、どういう理由から、どういう精神でそうするのか、よく注目して見ないといけない。

クウィンチリアヌス〕[一]

——九

それにしても、こう一歩一歩詰めよられて雪隠詰にされては、さすがの牧師さんも逃げるに逃げられず、さぞかし癪にさわることでしょう。いっそ今のうちに逃げられないものかと、こう云われるでしょう。「おい、誰だ、印刷の話ばかりしているのは！ 勝手に手前味噌をならべるがいい。抑ゝ断片の編輯者が同時に原著者の弁護を買って出るなんて、何処か臭いぞ」と。

弁護人？ 原著者の弁護人ですって？ わが匿名氏に一体どういった弁護人がついていて、その代理をわたしが引受けたというのですか？ 弁護人とは一定の裁判に対し一定の訴訟事件を取扱う資格のことです。わが匿名氏が何処ぞそこらでそんな資格を得ようと、こっちの知ったことではありません——もっともそれが読者に対して常識を擁護する資格ということなら、別でしょうが。だけどそういう資格なら、各自夫々天性もっているのです。各自自から与えられているものでしょう。他人からもらわなければならないものなんて一人もいやしません。肉屋の俎

でもなければ、牧師の職でもないのですから。

だが、こうしてこの善良な主任牧師さんの言葉尻をつかまえて見たところでしょうがない！こうして氏の云ってることのあら探しをしたって、氏の云わんとしていることはわからないのじゃありますまいか？氏の云わんとしていることは、わたしのことを匿名氏の弁護人を買って出ているのだ、匿名氏の弁護人だということなのです。そう云わんとしてるのです。車夫馬丁もみんな氏のことをそう解していると云って、大丈夫間違ありません。――

御自身そう云っているんです！――この先、道がどうなるのか、それがわかりさえすれば！　現に道はここで四方八方にひろがっているのです。主任牧師さんが弁護士というものをどう考えていらっしゃるのか、勿論それがわかりさえすれば、此の思想をつきとめる一直線の道もじきに見つけ出してお目にかけるのだが――

主任牧師さんもこいらでひとつ奇蹟をあらわし、正しい概念をつくってもらえませんか？　ひとつ本当の弁護士というものはどんなものか、はっきり教えてもらえませんか？　弁護士というものは、法律に精通し、正しいと確信がもてる事件しか引受けないといった誠実な人物を指すものか？いや、いや、氏の云ってるのは、そんな人物じゃなさそうだ。現にわたしにしたって、わが匿名氏の事件全体、あのまま有態に云って、善かつ真だと思ってるとは云ったためしはございません。そんなことは一度も云ってはおりません。むしろ反対のことを云って来たものです。なる程、箇々の点では匿名氏の云う通りな点もあり、何処までも正しいという点もあるが、全体として匿氏名の云わんとしたと思われる結論なるものはそれからは出て来ないということを論証して来たまでです。

一種の大風呂敷みたいに見られるかも知らないが、大胆に附え加えさせて下さい。時にはこの種の大風呂敷もまた止むを得ないことを公平な読者諸賢に知ってもらえれば、十分です。そしてこうした例は何もわたしにはじまったわけではないということが多感な読者諸賢にわかっていただければ。――わたしは何もわが匿名氏の意見に賛成だと、はっきりそう明言したわけではありません。断片の出版に携わるときまでは、キリスト教の獅子身虫の虫という嫌疑をうけるようなことは、爪の垢ほども書いたこともなし、また公然主張したこともございません。いかにもつまらぬことも大分書いたには書きましたが、その場合キリスト教というものを一般にその教えとこれを説いた人たちの所説に則って最善の姿で説明して来たのみならず、特にカトリック教徒、ソッチーニ派や当今の新人たちに対して、キリスト教といってもルッター派正統派のキリス

ト教を擁護して来たのであります。

これら拙稿は、主任牧師さんも大部分御自分でもよく御存知で、これについては兼々口頭なり活字で賛意を表されて来たものなのです。悪魔って奴は、天使の御姿はおろか、これまでまずい人間の姿に化れて出たこともないというのに、急にどうしてこのわたしに悪魔の姿を認められるのですか？　お互に同じ空気を吸わなくなってから、わたしの方がそう急変してしまったというのでしょうか？　お互に袂を別ってから、幾多のよりよい知識や洞察に到達すべき機会も野心も同じ位あったのに、その知識や洞察がかえって仇となってわたしは近視となり、悪人となってしまったというのですか？　よそ風に乗って、御同様上陸をたのしみに港に入ったところ、浪高き嵐のこの年齢になってようやく避難して来た岩礁にむざむざ難破していいものでしょうか？――いや、いや、どうして、わたしはいまだにまだ同じ人間です。それなのに主任牧師さんはもう同じ眼でわたしを見てはくれないのです。怒気がかれの視力を征服してしまったまでです。そして怒気が溢れてしまったまでです。[三] 何のために？いくらわたしが話したところで、誰が信じよう？《Tantaene aminis coelestibus irae?》[四]〔神々の心にかくも激しき怒りがあるのか？〕――だがわたしとてスープより前にデザートを平げるてな真似には参りません。

弁護人の話に戻って、云いますが――抑ゝわたしは現在繫争中の事件に関する訴訟依頼人と一心同体のわが匿名氏の本当の正式弁護人ではありませんし、またとてもそういうわけにも参りません。さよう、わたしは自分の訴訟依頼人の事件が公正だとは爪の垢ほども思っていないのに――いかなる突風もものともせず、無事何処かに上陸してみせると決意し――友情とか何とかのために、ざぶり、権謀術数の大海に乗込むといった豪の者じゃございません。実は匿名氏はわたしの友人ではなかったのです。実際どんな風の吹きまわしでこんなことになったのか、われながらよくわかりませんが、よしんばこんな不愉快な、こんな面倒なことにならなかったにせよ、かれの原稿ときたらまったく他所の原稿を五十篇取扱うよりやり切れない骨の折れる仕事になるでしょう。それもああやいやい、わたしの生存中に反駁してくれとせつかれたんでは。

神かけて、こんなことを今まで人に見せびらかそうなんてしたこともないので、この要求の事実を明かにしても、だからといって別段白々しい逃口上ではございますまい。だがこの要求は勿論利己的なものです。極度に利己的なものです。いっそ下手な反駁みたいなものも一緒くたに世間から葬り去ってしまいたい位でした。だがいまわたしには世間が必要となっているのです。というのは、わたしが司書として職業がら偏えに公正を持さんとしたにすぎません。だがこの断片にはわたしを困惑させ不安にした箇所が多々あったのも、まったく自明のことでした。それ

にわたしのような浅学非才の者には到底説明しようもない事柄も多々含まれているのです。道程百里こうしてこつこつと調べて来たものの、何の回答も得られません。こう回答が得られないと、いかばかり真理を愛する心を不安にするものなのか、主任牧師さんは勿論想像外でしょう。

それでは全然無だったのか？　自分で安心を求めていると信じてれば、自分の安心を求める義務なんか、わたし自身に対し皆無なのでしょうか？　だがわたしには読者以外、何処にこれ以上安心が得られると思う処があるでしょうか？　個人のこの世の束の間の幸福なんか、多数の幸福のために犠牲にすべきだとは、わたしとてもよく承知しております。だが個人の永遠の幸福までもか？　悶々たる懐疑を公表して信仰うすき者まで怒らせる位なら、いっそのことそんなことから解放されないように、このわたしを神と人間の前に縛りつけておけるものが何処にあろう？――主任牧師さんからこれについて答えていただきたいものです。――

実際、わたしも自分に托された古文書についてこの種の燃えさかる炭火を世間に伝えてもよいとの格別の免許を得てたわけでもないのです。この格別の免許といっても、実は主君から賜わる全般的な免許の中に入っているものと信じていたのです。こう信じていたので、わたしは主君の信頼に値しないことを身を以て示したのでした。さればわれとわが身の不幸を歎くも、われながら罰当りな話です。いや、いや、こうなったからには、この件で全正な司直の手を煩わしてかまいません。神がせめてあの怒れる牧師の手からお守り下さるのなら！

だが、いまわたしがここで序でながら、匿名氏自身何もそう急いで公表する気はなかったのだと告白したら、あの怒れる牧師はそれこそ何と云うだろう？　今になって公表してしまったのは、匿名氏の本意でなかったばかりか、全然本人の意志に反したことだったのです。実はこのことは、わたしが紹介の労をとろうと決意する以前、まえがきの冒頭を原稿のまま目を通したときからその気になっていたのでした。それはこう云っています。『ここにまえがきを認めている本書は、すでに何年か前に稿を起したものである。しかし何度か読み返して加筆した箇所も多く、また大分削除訂正したところもある。専ら自分自身の気持を落着かせるのが最初から自分の思想を書きしるす動機だったので、何も自説を公表して世間を惑わしたり、不穏なことを起すきっかけをつくろうなどともくろんだことは毛頭ない。本書は理解ある読者諸賢の用に内々供せられよう。時代がこれ以上啓蒙されないうちに、強いて上刻して流布せんとするがごときは、わたしの素志ではない。事、私の責めでなくとも、真理のために多数の俗衆俗輩どもの憤激を買い、熱狂的狂信に奔らせんよりは、ここ当分は迷わせておくに如かずである。尚早な見解を発表して、自他ともに不幸に陥れんよりは、賢者はむしろ平和のために世論と習慣に順応し、これを寛容し、これに対し沈黙を守るに如かずだ。もと

より本書所収の論文は教理問答式のものではなく、どこまでも神に対する理性的尊崇、人類愛と徳行との実行という埒外に出ずるものでないことは予めおことわりしておかねばならない。だが自分は自分自身に対し、自分の抱懐する疑惑に対し十分解答を与えたのであって、自分にとって多くの躓きの石となった信仰なるものが果して真理の法則と両立し得るものなりや否や、根本的に究明せざるを得ない！」

ルッター及び諸聖人の皆々！主任牧師さん、どうお読みなさいました？ よもやわたしがこんな罰当りな奴とは思ってもいなかったでしょう？ そうじゃありませんか？――盛んに無神論者ぶったことを云ってるが、もともと匿名氏は実に誠実な男で、自説で世間を迷わそうなんてしたことはありません。そしてわたしはというと、わたしにしても他人の説で世間を迷わそうなんて考えはひとつもありません。匿名氏はまことに温厚の士で、別に不穏なことを起す機会をつくろうなど思ったこともありません。そしてわたくしはというと、わたしにしてもあらゆる不穏なことに超然たるものでして、主任牧師さん、わが神聖至上の宗教の栄誉のために、一ケ村でもそんなことがおっぱじまろうものなら、精励勤直な牧師さんとしていかばかり心を痛めることか、御自身一番よく御存じの筈です。匿名氏ときたらまことに慎重居士で、人一人たりとも真理のために躓かせるような男ではありませんでした。そしてわたくしはというと、わたしにしてもそのような躓きの石は全然信じません。大体、真理が多数の俗衆俗輩どもを熱狂的狂信に追いやるのは、ただ単なる研究の対象にすぎないような真理じゃなく、それこそ今直ちに実行に移さんとする真理あるのみと確く信じているからであります。

匿名氏はなかなか利口な男で、時期尚早な意見を発表して、自他ともに不幸に隠れんとするが如きことはいたしませんでした。だがわたしはというと、わたしはしっかりした根拠があれば、意見の発表はいくら早くても人類にとって時期尚早なんてことはないという考えですから、この通り暴れん坊のこととていの一番に一身を顧みず危険にとび込んでみた次第です。わが匿名氏は――いつ書かれたものか知りませんが――自分が真理としていたことが、公然と説かれるより先きに、先ず時代の方がもっと啓蒙されねばならないと考えていたのです。だがわたしはというと、わたしはかれの真理としていたことが事実かどうか差し当り検討を加えるには、いまさらこれ以上時代の啓蒙化をまつまでもないと信じているのです。

以上、主任牧師さん、以上の通りです。匿名氏のあの殊勝な謙虚と慎重ぶりとはうらはらなかれの論証に対するあの自信、庶民に対するあの軽侮、同時代人に対するあの不信があほどひどくなければ！ ああした考えは当然原稿を理解ある読者諸賢の閲覧に供せんよりは、破棄して

しまった方がよかりさそうなものなのに！――それとも主任牧師さん、あなたもそう仰有るのですか？理解者どもが内心どう信じていようと、かまやしない。民衆さえ、愛する民衆さえ、お坊さまたちの操縦する通り、おとなしくしていてくれればと、そう仰有るのですか？　どうです？

訳者注

その五

一　Cognito …… est ――アウグチヌス書翰集（Epistolae）の第一一八、ディオスコールス宛、手紙第一二ある言葉。ディオスコールスはアウグスチスと手紙名宛人という以外にあまり知られず、御教示を乞う。

二　クレマン、ラヴァイヤック、ダミアン――いずれもフランスの神父で、国王弑虐者。すなわち、クレマン Clement, Jacques,（1567―'89）はドミニコ修道会神父、一五八九年七月三十一日フランス国王アンリ三世を暗殺する。――ラヴァイヤック、Ravaillac, François,（1578―1610）、フュイヤン（Feuillants）の修道会所属、宗教的狂信から一六一〇年四月十四日アンリ三世の後嗣アンリ四世を殺す。――ダミアン Damien, Robert François（1715―'57）、イエズス会修道会に勤め、同会のため一七五七年一月五日ルイ十五世暗殺事件に加わり果さず、車裂の刑にあう。

三　聖霊に感じ、云々――新約、ペトロ第二の手紙、第一章二一節。

四　*απαξ λεγομενον*――一度云っているだけで、他所では云っていないこと。

五　リボウの『嘘も方便』云々――Ribow, Georg Heinrich（1703―'74）、ゲッチンゲン大学の哲学及び神学の担当教授、ハノーヴァの監督牧

師。integrum……以下の言葉はその著『教父たちにも嘘も方便ということとこれによる討論法』(De oeconomia patrum et methodo disputandi *κατ' οικονομιαν*) からの引用。

六　ヒエロニムス――モエロニムス、Hieronymus, Sophronius Eusenius (321/340―412/20)、ラテンの教父、聖者に列す。ヘブライ語旧約を新しいラテン語に翻訳す。またラテン語新約を改修、カトリック教会公認の所謂ヴルガータ訳聖書はこれに基く。教会きっての大学者だったが、またなかなかの野心家で、苦行修業の末ローマに至り、教皇ダマーススの秘書となったが、放逐され民衆の不満を買い、晩年ベツレヘムの修院長として布教、教育事業に従う。ヘブライ、ギリシャの東方の神学を西方ラテンの教界に伝えた功績は著しい。初期教会文献史、聖人伝、聖職の伝を著している外、聖書の注釈や多くの書翰類をのこしている。なお後出、その六の注参照。

その六

一　ヒエロニムスのルフィヌス駁論――ヒエロニムスはオリゲネス派やペラギウス派と対立した。殊にオリゲネスの正統性についてはルフィヌスと論争した。ここの引用は『ルフィヌス駁論』(Apologia adversus libros Rufini, 401/402) からとったものという。――ルフィヌス Tyrannius Rufinus (約345―410)、ラテン教会著作家東方教会のことに詳し。東方旅行中ヒエロニームスを知って修道士となる。三九七年ローマに帰ったオリゲネスの主著『原理論』を訳したが、折柄オリゲネス論争の最中とて、その論争を削除修正して正統派に近づけんとしたが、ヒエロニムスにその異端性を指摘され、以来両者の友情は破れ、四〇〇年故郷のアキレアに帰る。

二　オリゲネスの『原理論』――オリゲネスは初期キリスト教会最大の教会学者。アレキサンドリアの教校でクレメンス(栗原貞一『アレキサンドリアのクレメンス研究』に詳し、参照)に就いて学び、ギリシャ哲学に造詣が深い。キリスト教の教養、信仰を学問的に体系化し、キリスト教神学を始めて大成した(有賀鉄太郎『オリゲネス研究』参照)。教説が厳格だったとこから、「鋼鉄の人」(Adaman od Adamantius)の異名あり、アレクサンドリアの教院長となったが、同地の司教と衝突、パレスチナのカエザリアに追わる。デキウス帝の迫害に屈せず、信仰を貫き、ティルスで殁した。プラトン派哲学の影響が強く、そのためにアレクサンドリア教会公会議(三九九年)で批判され、後またコンスタンチノープル公会議で新プラント主義のかどを以て異端に宣せられた。ここに問題となっている主著『原理論』四巻(*περι αρχων*――ラ

テン訳では De principiis）はルフィヌスがラテン語に訳して西方世界に伝えたが、当局の禁圧をおそれて、削除したり改竄しているので不完全なるを免れない。この誤りを訂正したというヒエロニムス訳も失われてない。ギリシャ語源本も断片しかのこっていないという。（なお石原謙「キリスト教の源流」一一七頁以下参照）

三　チランヌス派――前注一のルフィヌスの名前がTyrannius といったところから、ルフィヌス門下のこととチランニウス派(scola tyrannica)という綽名が生れた。レッシングはこのことを知ってか知らずか、Tyrannis―Tyrann（暴君）という言葉に面白味を見出しているようである。

五　habent sua feta libelli ――アフリカ生れのラテン語文法学者、テレンチアヌスの言葉として知らる。その著、『英雄物語』（Carmen heroicum, 258）より出ず。その他ラテン語の韻律に関する教訓待なども聞いている。

六　ポルフュ主リウス云々――ポルフュリウス Porphyrius（紀232―紀304）、シリヤ生れのプラトー派哲学者、ローマでプロチノスに学び、その有力な後継者に擬せらる。プラトン・アリストテレス（規範学入門 Eisogoga）、プロチノス（プロチノス伝、プロチノス全集）の注釈書の外、宗教哲学、哲学史等に関する著多く、また反キリスト教論を書いている。ここに挙げてある『キリスト教徒駁論』十五巻もその尤なるもの。同書はケルスス、ヒエロクレス等の著書とともにテオドシウス二世、ヴァレンチニアヌス三世の迫害にあって焚書となり（四四八年）、散佚、わずかに断簡が教父たちの間に伝わる。

七　イーザク・フォッシウス――フォッシウス（Vossius, Isaak, 1618―'89）、ヴィンザー司教座聖堂参事会員。一六四六年には『イグナチウス書翰集』。一六五八年にはスペイン出身の地誌学者『ポンポニウス・メラ論考』を著す。――サルヴィウス Salvius, Johann, Baron Adler（1590―1652）はスウェーデンの政治家。好学の篤志家として知らる。

八　リットマイヤー『コンリング書翰集』――リットマイヤー（Ritmeier, Christoph Heinrich, 1671―1719）はルッター派の神学者、ヘルムシュタット大学教授。ゲルマン法制史の父といわれるコンリング（Hermann Conring, 1606―'81）の手紙や考証、注釈の類を編纂して一七〇八年ヘルムシュタットから出版す。書名は詳しくは、Coringiana epistolica sive animadversiones variae eruditionis ex Hermanni Conringii miscellaneis nondum editis libatae（直訳すれば、コンリング書翰、及びヘルマン・コリングの未刊の雑多な著作から蒐集した諸学注釈撰』）

九　アベラール――Abelard, Pierre, ラテン名は Abaelardus, Petrus（1079―1142）中世フランスの神学者、唯名論者ロスランの弟子。この二人は当時の西ヨーロッパの封建制の条件下で歴史的に最初に現われた唯物論者であった。神学をアンセルムに学びパリ大学の神学教授となる。従来の認識論に批判のメスを入れ、実体論と唯名論という当時の対立する根本的哲学を批判しつつ両者を綜合した独自のスコラィ哲学を開く。就中弁証法を神学の対象にまで適用し、聖人伝等の批判的研究を促す。そのため正統派からは異端として迫害され、著作は焚かれる。女弟子エロイーズとの悲恋を綴った往復翰は今日でもひろく読まれている。主著は、《Lic et Non》（然りと否）、《Theologia Christiana》（キリスト教神学）、《Scito te ipsum》（汝自身を知れ）、《Histonia colamitatu mearum》（わが悲恋の物語）等々。レッシングがここで問題にしているのは《Lic et Non》である。これは教会博士たちの矛盾撞着した教義や倫理的命題をあつめたもので、当時は禁書だった。これらの禁がとかれたのは、フランス革命以来のことで、フランスでは一八三八年クーザンが未刊の禁書を公表、ドイツではようやく一八五一年マールブルクで、ヘンケ及びリンケンコールにより出版される。

一〇　聖ベルナルドゥス――Bernhardus, Bernhard de Clairvau（1091―1153）、教会博士、クレルヴォー修道院の創設者、シトー大修道院長、一一七四年列聖。アウグスチヌスに傾頭し、中世フランスの修道院中心の反動的な神秘主義の教祖的存在となる。アベラールを目の仇きとし、また科学の発達に理解がなかった。「蜜の流るる博士」（doctor melifuus）という綽名があった程の雄弁家で、また屢〻政治上の事件に関与し、就中第二次十字軍を起らせたので有名である。修道院的敬虔を主唱したかれの神秘主義は、聖フランシスと並んで、後のプロテスタンチズムの敬虔主義に深甚な影響を与えた。

一一　ダンボワーズ――François d'Amboise（1550―1620）、一六一六年、最初のアベラールの全集を出した人。

一二　マルテーヌ――Marteine, Edmond（1654―1739）、フランスのベネヂクト派の修道士の学者。――デュラン Durand, Ursin（1682―？）、同じくベネヂクト派修道士の学者、マルテーヌと共編で、『新修未刊奇覯本』（Thesaurns Novus anecdotorum, 1717）を出版、その第五巻にアベラールの『キリスト教学』が収められていた。――ペッツPetz）、Bernhard(1683―1735）オーストリアのベネヂクト派修道士、一七二一年より『新々未刊奇覯本』（Thesarus anecdotorum novissimus）に、アベラールの『汝自身を知れ』（Scito te ipsum）を収めて刊行す。

一三　ダシェリー――Jean Luc d' Achéry(1609―'85)、同じくベネヂクト派の学僧、パリーのサン・ジェルマン・デ・プレの修道院附属図書館

長。カンタベリー大司教になったパヴィアのランフランコの全集(Lanfranci opera, 1648)を出した外、ベネヂクト派図書館所蔵の未刊希覯本をあつめて編纂版行した。(Spicilegium sive collectio veterum aliquot scriptarum qui in Galliae bibliothecis maxime Benedictorum, latuerunt, 1655—'77, 改訂増補1723)

一四　『イエス伝』云々——アルトドルフの史学教授ワーゲンザイル（Wagenseil, Johann Christoph, 1633—1708）は一六一一年、キリスト教を攻撃したユダヤ人の書をあつめて、『サタンの火箭』Tela ignea Satanae）と題し、これに自分の反駁を添えて出版した。その中に『イエス伝』(Toldoth Jeshu）というのが入っていた。ゲッツェはこの書をレッシングが出版した『匿名氏の断片』に比し、「ユダヤ教徒には、特にこの最後の断片は非常によく迎えられたろうが、イエスとイエスの宗教に対するかれらの不信とかれらの敵意を強めた点ではこの『イエス伝』以上にかれらの役に立った書はあるまい」と評した。

ところがワーゲンザイル教授はこの『イエス伝』の第一の編輯者として、スペインのドミニコ派の学者マルチーニ（Raymundus Martini, 1236—1286？）の名をあげ、第二により弱年のポルケトゥスの名をあげている。そしてこのポルケトゥス訳によって、これを独訳したのは外ならぬルッターだと云ったのである。そこでレッシングはワーゲンザイルの序文から、ポルケトゥスとルッターの二人の名をあげているのである。ワーゲンザイルは名前から見てもユダヤ人であることは容易に察しられよう。同教授によれば、ヘブライ語の原典を最初に公表したのは、マルチーニで、このスペイン人説教師こそユダヤ人やモール人説教師をキリスト教に改宗させた当人である。かれはまたアラビア語文書を多く引用して、有名な『信仰の剣』(Pugio fidei, 1278）を著しているが、同書はその後一六八七年カルプソヴィ（Carpzovi）が序文をつけて刊行されたという。

一五　ポルケトゥス——Porchetus de Salvaticis, 十四世初頭、ゼノアのカルトゥジオ会修道僧、その著『冒神のユダヤ人に対する勝利』(Victonia adversus impios Hebraeos）は、死後一五二〇年A・ユスチニアヌの手で刊行された。

その七

一　クウィンチリアーヌス——Quin(c)tilianns, Marcus Fabius（※35—95）、スペインのカラグリス出身、ローマの雄弁家で著述家、修辞学

の師傅としてヴェスパシアヌス帝に招かれ、二十余年仕え、後専らドミチアヌス帝の子弟の薫育にあたる。晩年教育体験を『雄弁論』(Institutio oratoriae Libri XII) 十二巻にまとめた。雄弁論とはいうが、絵画、文芸にも及んだ一種の芸術論で、ギリシャ、ラテンの重要な抜萃が収められているので知られている。大のキケロ崇拝家で、自ら古典の擁護者を以て任じたが、二世紀にはマルクス・アレリウスの師傅で、同じく雄弁家として聞えたフロントー Fronto, Marcus Cornelius (100—175頃) らの擬古典派に圧せられて振わず、後ようやく一五—一八世になって人文主義者や宗教改革の運動に大きな影響を与える。エラスムス、ルッター等に盛んに利用したが、フリードリヒ大王のような啓蒙君主も大いに評価したというが、一方反宗教改革運動のために少からず圧迫されたものだった。——引用は『雄弁論』第十二巻、第一章三七節。

二　ソッチーニ派——提唱者ファウスト・ソッチーニと Fausto Sozzini (Socinus) (1539—1604) と叔父レリオ・ソッチーニ Lelio S. (1525—'62) という二人のイタリア神学者の名によって呼われる革命的な宗教改革運動の一派。理性と道徳に基きカトリック教会を批判、殊に正統派の三位一体論に反対したため、イタリアを追われて北上し、ポーランドに逃れるが、ユニテリアンとしてルッター派からも猛烈な攻撃を受け、新旧正統派から異端とされ、大陸を追われて北欧からイギリス、アメリカに逃亡の余儀なきに至ったが、一七七四年ロンドンに本拠をかまえるようになり、啓蒙時代に入って再び勢を盛り返す。ライプニッツは勿論同派には批判的だったが、レッシングはヴォルフェンビュッテル図書館長としてソッチーニ派の文書を堙滅から救わんと努めた。こうしてレッシングはかれらの並びに当時の新人たちの文書を紹介しながら、匿名氏の場合と同様、決してかれらに対する批判を忽がせにしていたわけではなかった。例えば、ユニテリアンの『アダム・ノイゼルについて』(《Von Adam Neusern》, 1774)、『ヴィソヴァチウスの三位一体論』(《Des Andreas Wissowatius Einwürfe wider die Dreieinigkeit》 1773) 等々。

三　怒気が云々——ゲッツェの手紙にレッシングが返事を出さなかった一件を指す。その一の注参照。なおこのことではレッシングの『一、〇〇〇ドゥカーテン物語』に顚末を述べている。

四　Tantane … irae? ——ヴェルギリウス『アイネーイス』第一歌、一一行。

五　燃えさかる炭火——新約、ロマ書、第一二章二〇節。